

# 苦東ハスカップ 保存へ移植

## 自生種 青森・六ヶ所村に

自動車関連産業などが集まる工業団地「苦小牧東部地域」を管理する第3セクターの苦東（苦小牧市）が、敷地内にある自生種のアスカップ30本を、青森県六ヶ所村の工業団地に植えた。自生種保存が狙いで、苦東によると保存を目的として、道外に移植するのは初の試みだ。アスカップはジャムなどの加工用原料として需要が高まり、甘酸っぱい実をつける農業用の選抜種は増えていくが、自生種は湿地帯の乾燥化で立ち枯れが増えている。



苦東から移植された自生種のアスカップ（昨年10月31日、青森県六ヶ所村で）＝新むつ小川原提供

アスカップはスイカズラ科の落葉低木。苦小牧市などに広がる勇払原野に自生していたが、開発で自生範囲が減った。自生種は淡みやえぐみの強い実も付けるが、栽培農家は、販売しやすいよう、食味の良い実をつける株を集め、選抜種を育ててきた。

移植先に青森県六ヶ所村が選ばれたのは、苦小牧市と気候が似ていることや、第3セクター「新むつ小川原」と苦東が工業団地の分譲や管理を通じて交流があったため。移植作業は10月

下旬に行われ、自生種の群生地から間引きした高さ約1メートルの木をフェリーで運び、新むつ小川原の敷地内に植えた。アスカップは、近くの福祉施設の入所者が収穫体験するために活用されるという。

勇払原野の環境保全や調査研究を行っているNPO法人「苦東環境コモンズ」（事務局・札幌市）では、苦東内のアスカップ自生種の保存に向けて調査を続けている。コモンズによる

読売新聞  
2015.01.08

と、約40年前の調査で群生地1畝当たり2500本あった自生種は同1800本に減っている。コモンズは2012年、苦東内の自生種のアスカップの群生地を「サンクチュアリ」（保護区）とし、自生種の保存が継続できるよう、苦東と協議するなどしている。

同コモンズの草刈健事務局長は「自生種のアスカップが育つ風土を見守る人や仕組みが大切だ」とし、道外の移植について「群生地は異常気象や山火事などでなくなる可能性があり、分散保存は必要なことだ」と評価している。